



あなたのお名前は？

この号よりATRの外国人研究員支援グループ（SHIEN）の日常を連載していくこととなりました。私たちが、母国を離れ気候や習慣の異なる日本で暮らす外国人研究員と触れあい奮闘していくなかで、感じたこと悩んだことを綴っていきます。

スイスのシンクタンクIMD¹の世界競争力ランキング2000年版によると、「外国人の雇用がしやすいか」という項目で日本は47カ国中最下位だそうです。このことは、残念なことですが、日本人にとって日本で働く外国の人々はまだまだ特別な存在であること、また同時に、外国の人々にとっても「日本で働くこと」に私たちが想像する以上の壁があることを示すものでしょう。

ATRでは短期から長期雇用者まで常時70人前後の外国人研究員がいます。SHIENは外国人研究員とその家族を支援する専門グループとして、ビザ手続に始まり、到着時の宿舎説明や買い物の付き添い、入社オリエンテーション、日本滞在に必要な各種法手続のサポート、多種多様な相談事の相談窓口、そしてATRを退社し日本を離れるまでのサポートを一貫して行っています。その存在が、海外から来る側と迎える側、両者の安心材料となり、「外国人の雇用」が少しでも自然に成り立っていくための一つの役割を担っていければ……と思っています。今回は、初出勤日の社内手続を通して日本の習慣に触れる彼らをどのようにサポートしているか、その一端を紹介します。

日本には名前に「フリガナ」を振る習慣があります。名前の読み方は様々で、予想もつかない読み方もあるので便利な習慣ですが、海外にはないものです。SHIENが行う入社オリエンテーションでは、「お名前の発音を確認させて下さい」と研究員一人一人に直接尋ねます。「レですか？レーですか？」「チンですか？ツインですか？」などなど。ましてや「アとエの中間」など日本語にない発音になると苦労します。そこまでしてフリガナを無理に振らなくても、と思われるかもしれませんが、社内の書類、銀行や役所の手続などフリガナの出番は意外に多いのです。社内手続でいうと、ATRの給与支払いは銀行振込を原則としており、外国人もちろん例外ではありません。そこで日本の銀行に口座を開くため、申込用紙のフリガナ欄に記入が必要となります。そのとき外国語故の微妙な発音の差違から社内と銀行で少しでもフリガナが違っていると、別人とされてしまうので注意をしなければなりません。そのため、予めそういう日本の習慣や日本語にはない発音があることを説明し、そうすることで物事がスムーズに進みそうなら、わざと日本語的な発音を聞いてもらい「これはどうですか？」と尋ねたりもします。逆に日本で何年間か暮らしてきた人に「私の名前は〇〇（日本語的な発音）をお願いします」と言われたケースもありました。それが一番確実に手っ取り早いというのです。

フリガナの他にも、姓と名の順番の問題があります。母国の習慣通りに「名・姓」で銀行口座を開き、公共料金を「姓・名」で申込み、口座振替の手続を行ったら登録できずに、結局「姓・名」で新しい口座を開いた、なんていう話も実際の体験談としてありました。

「日本で暮らしていくうちに様々な場面で名前を尋ねられるでしょう。その時母国語の発音をして「えっ??」と聞き返されたら、〇〇という発音なら日本人は聞き取りやすいですよ」と一言アドバイスをすることもあります。もちろん、その人が実際に自分の名前を日本語的に発音するかどうかはその人次第です。ただ、日本にはどんな習慣がありどんな場面に遭遇するかということを前もって伝えておくことで、日本で暮らす「とまどい」を減らす手助けになると考えています。

それは、少しくらい本来とは違う発音でも気にせずどんどん「〇〇さん、こんにちは!!」と名前を呼びかけあうことで、コミュニケーションが始まると思うからです。

SHIEN 辰巳 真起子



入社オリエンテーションの様様

¹ International Institute for Management Development